

[講演要旨]

684年と887年の間に未知の南海トラフ巨大地震があるか？

石橋 克彦*

Does an Unknown Great Nankai-trough Earthquake Exist between 684 and 887 ?

Katsuhiko ISHIBASHI *

§ 1. はじめに

文献史料から推定される南海トラフ巨大地震は、1361年以降は、1498年、1614年(注1)、1707年、1854年、1944/46年で、約100～150年ごとに発生している。しかし1361年以前は、1096/99年、887年、684年で、200年以上の間隔があり、未知の地震が存在するのではないかと問われてきた。今回は684～887年を検討し、887～1096/99年についても付言する。

§ 2. 延暦十三年七月十日(794年8月9日)の事象

2012年4月の新聞報道(注2)によると、今津勝紀氏が新発見史料により、平安京遷都直前の標記事象が南海地震だった可能性があると発表したという。新史料は『日本紀略』の「震于宮中并京畿官舎及人家。或有震死者。」である。磯田(2013)は「これで200年などという間隔をあけることなく、南海トラフは必ず動いていることがはっきりしてきた」と述べている。なお、保立(2012)はこの地震を「長岡京地震」と呼び、当時の政局にとって重要な意味があったであろうとしている。

しかし、『日本紀略』は「地震う」とは書いておらず、「震」「震死」の第一義が「雷」「雷に打たれて死ぬ」だから(注3)、この事象は雷だった可能性が高い。原記事は『日本後紀』の逸失部分に存在したと思われるが、菅原道真が六国史の記事を事項別に編集した『類聚国史』の「災異部五・地震」には採録されておらず、当時から雷と認識されていたのではなかろうか。

ただし、森田(2006)は「宮中と京・畿内の官舎および人家が地震により揺動した。この地震により死亡した者がいた。」と訳している。だが地震だったとしても、南海巨大地震であれば、『日本後紀』に五畿七道云々といった詳しい記事が書かれて、『類聚国史』がそれを(『日本紀略』もある程度)転載したはずだと考えられる。そういう記述がないことから、南海トラフ巨大地震だった可能性は低いとしてよいだろう。

新聞記事では、『日本紀略』延暦十五年二月廿五日条の南海道駅路付替えの勅命が地震に関連しているという推測も報じられたが、それは原文どおり「遠回りで命令の伝達が困難」だったからだろう。

§ 3. 天平六年四月七日(734年5月14日)の地震

宇佐美(2003)が本地震の震災地を「畿内・七道諸国」としているの、南海トラフ巨大地震の可能性を疑う向きもあるようだが、萩原・他(1989)が指摘したように生駒断層系の活動と考えられていることを再確認

したい。保立(2012)は「八世紀河内・大和地震」と呼んでいる。ただし、本題から離れるが、本地震によって本当に菅田山古墳が損傷したとしたら王権の衝撃は大変なものだったと思われ、『続日本紀』の一連の記事がそういう状況と整合しているのかどうか、古代史研究者の詳しい解釈を聞きたいものである。

§ 4. 887～1099年の中間に987年南海地震？

徳島県海陽町浅川の千光寺に「薬師如来出現図」という大きな絵馬がある。永延元(987)年五月に漁船が激浪に吞まれそうになったときに薬師如来が現れて助けたという縁起伝承を江戸時代末に描いたものだが、これは南海地震の津波ではないかという新聞記事が2002年に出た(注4)。記事では、奈良県広陵町箸尾遺跡の10世紀後半の液状化跡(寒川, 1997)も結びつけている。しかし、絵馬の激浪が本当に987年か、また津波か、不確かさが何重にも存在するし、液状化を生じた地震の発生年と震源域もわからない。

この時期の基本史料として藤原実資の『小右記』があり、かなりの地震記事を含んでいるが、永延元年五月の毎日の条(廿六日のみ欠)に地震の記述はまったく見られない。『日本紀略』や『扶桑略記』にも地震の記事はない。完全に否定はできないが、江戸時代末の絵馬と奈良県の液状化跡だけから推測された南海地震は、存在の可能性が低い。

注1、石橋(1983)以来南海トラフ津波地震と考えていた1605年地震は伊豆-小笠原海溝沿いの超巨大地震で、1614年にやや小型(?)の南海トラフ地震が発生した、という可能性がある(石橋・原田, 2013, 地震学会秋季大会で発表予定)。

注2、例えば「毎日新聞」大阪本社版2012年4月18日付朝刊。

注3、「震死＝地震死」の場合もあるが、「安元二年三月一日。雷落法勝寺九重塔。第九層。下部二人震死。御塔無事。」(百鍊抄)のように使われる。

注4、「毎日新聞」大阪本社版2002年5月20日付朝刊。なお、都司(2011)も、この絵馬が「忘れられた南海地震」の記録である可能性があるとして述べている。

文献：萩原尊禮(編著)(1989)『続古地震—実像と虚像』東京大学出版会、保立道久(2012)『歴史のなかの大地動乱—奈良・平安の地震と天皇』岩波新書、石橋克彦(1983)地震学会講演予稿集No.1,96、磯田道史(2013)「朝日新聞」4月6日付朝刊,e7、森田悌(2006)『日本後紀(上)全現代語訳』講談社学術文庫、寒川旭(1997)『揺れる大地—日本列島の地震史』同朋舎出版、都司嘉宣(2011)『千年震災—繰り返す地震と津波の歴史に学ぶ』ダイヤモンド社、宇佐美龍夫(2003)『最新版日本被害地震総覧[416]-2001』東京大学出版会。

* e-mail: ishi@kobe-u.ac.jp